

## 陳 述 書

平成 23 年 10 月 31 日

星 雅彦

※

- 1 私は現在、沖縄県文化協会の会長、浦添市文化協会会長、うらそえ文芸編集長を務めており、沖縄の美術評論家・詩人として国際美術評論家連盟、日本ペンクラブ、日本詩人クラブ及び日本現代詩人会に所属しています。琉球新報では 40 年以上も前から 2 カ月に 1 回の「美術月評」、その後 3 カ月に 1 回の「美術月評」を担当し、同コラムの評論は平成 20 年(2008 年)12 月まで続けました。
- 2 平成 20 年(2008 年)8 月頃だったと思います。当時、琉球新報の文化部におられた宜保靖氏(現整理部長)から原稿の依頼がありました。慶良間の集団自決はどうかと訊いたら、それを書いてみてくれといわれましたので原稿依頼を引受けました。
- 3 慶良間の集団自決については、昭和 46 年(1971 年)6 月に発行された『沖縄県史』の「県史 9 巻戦争記録 1」を執筆するため、作家の宮城聡氏と沖縄本島中南部各地を分担して聞き取り調査をしました。その過程で照合していた沖縄タイムス社の『鉄の暴風』には、米軍上陸日や梅澤隊長が生存しているのに死亡したなど、誤謬記録が 20 年間(当時)放置してある点に気づき、不信感を抱いていました。また、県史とは別に名嘉正八郎資料室所長とともに、あるいは単独で、慶良間諸島に 3 度渡って調査をしました。直接取材した集団自決の体験者約 200 人の証言の聞き取りを録音したテープをウチナグチ(沖縄方言)からヤマトグチ(日本語)に翻訳して文章化しました。昭和 46 年(1971 年)の『潮』11 月号では、そうした証言をもとにドキュメント「集団自決を追って」と題する論考を発表しました。
- 4 「集団自決を追って」は、渡嘉敷島の集団自決に至る経過を克明に描いたものでした。集団自決は村民が自らの意思で選択したものだという趣旨でした。物語風な書き表現もオブラートに包んだものにとどめていましたが、事実だと思われることを盛り込んで隊長命令はなかったことを訴えたつもりでした。独自の調査と村民たちの証言

を通じて、赤松隊長や梅澤隊長が住民に自決を命じたという噂には信憑性がないと確信していたからです。

- 5 私が琉球新報の宜保部長に提出した約2千字の原稿も、集団自決が軍命による強制だったというのは根拠がないばかりか、却って皇国史観や軍国思想に洗脳されて村民が軍に協力していた当時の空気を伝えられなくなってしまうことを内容とするものでした。
- 6 私の原稿に目を通した宜保氏は、「これは右翼が喜ぶ内容になっている。少し考えさせて下さい」と言って原稿を預かっていきました。しばらくしてだいが手を入れてリライトしたものを見せられました。隊長命令はなかったという論旨は随分と曖昧になっていました。さすがの私もこのやり方には怒りを感じましたが、それでも命令がなかったということが通じればよいと思い、「それでいい」と発表を承諾しました。ところが4、5日ほどしてから宜保氏から電話があり、リライトしたものも載せられなくなったといってきました。迷惑をかけたので原稿料を支払うということでしたが、私は貰うわけにはいかないと断り、あの原稿でも載せられないというのはおかしいことですね、と控え目に抗議しました。
- 7 その後、琉球新報には平成20年11月5日付「美術月評」と12月25日付「美術の年末回顧」の原稿を執筆しています。平成20年2月上旬になって「美術月評」の原稿を書きながら催促がないので問い合わせたら、電話に出た女性から、もう昨年で終わったことになったはずだといわれました。そんな話は聞いていないと抗議したところ、すぐに謝ったのでそれ以上追求しませんでした。その後、宜保氏に電話で1度不満をいったことがあります。彼は黙っていました。
- 8 私がドキュメンタリー作家の上原正稔さんに連絡をとったのは、平成20年(2008年)10月頃のことでした。当時、集団自決のことは物書きの間でも話題になっており、上原正稔さんが隊長命令をめぐる琉球新報と喧嘩しているということは知っていましたので、彼はどう考えているのか会って話を聞いてみたいと思ったのです。会ってみたら、同感することが多かったので、「うらそえ文芸」に対談の形で掲載することにしました。
- 9 上原正稔さんとの対談は、県庁の向いにあるホテル「レインボー」のレストランで3回ほど逢って対談を録音し、それを整理して、平成21年(2009年)5月発行の『うらそえ文芸』に「対談・上原正稔との一問一答―集団自決をめぐる―」と題して掲載しました。そこでは集団自決が軍の強制によるものだとすれば、かえって皇国思想

や軍国主義の洗脳によって集団自決が起こったという真実を覆い隠すことになりはしないかという持論に加え、政治的キャンペーンを張るのはいいが、自分たちに都合の悪いことは載せないで世論を統制しようとする今の沖縄の新聞にみられる編集方針の奢りと偏りの問題を指摘しました。この対談には多くの人たちが関心を寄せて話題となりました。その中にいろいろな真実が含まれていたからだろうと思います。

- 10 私は、集団自決の真相について書いた依頼原稿が掲載を拒否された経験から、上原正稔さんに対する掲載拒否も自社のキャンペーンにとって都合が悪いと考えた琉球新報の編集方針によるものとみています。琉球新報には、社会の「公器」を預かるものとしての自制に欠け、沖縄の世論を意のままに操作・演出できるとの奢りさえ感じられます。「真実」に謙虚になり、「公正」を重んじ、少数の多様な意見にも耳を傾ける姿勢が必要です。そうでなければ、沖縄の世論と言論に成熟はありません。

それが、沖縄の言論人の一人として、また、沖縄の世論と民主主義の成熟を願うものとして、この度、上原正稔さんが琉球新報に対して起こした裁判の趣旨に共感し、自らの体験と良心とするところを証言する決意をした理由です。

以上